

## 第5章 ヤングケアラーに関する学校調査

(教員対象 単純集計)

### 5-1 属性

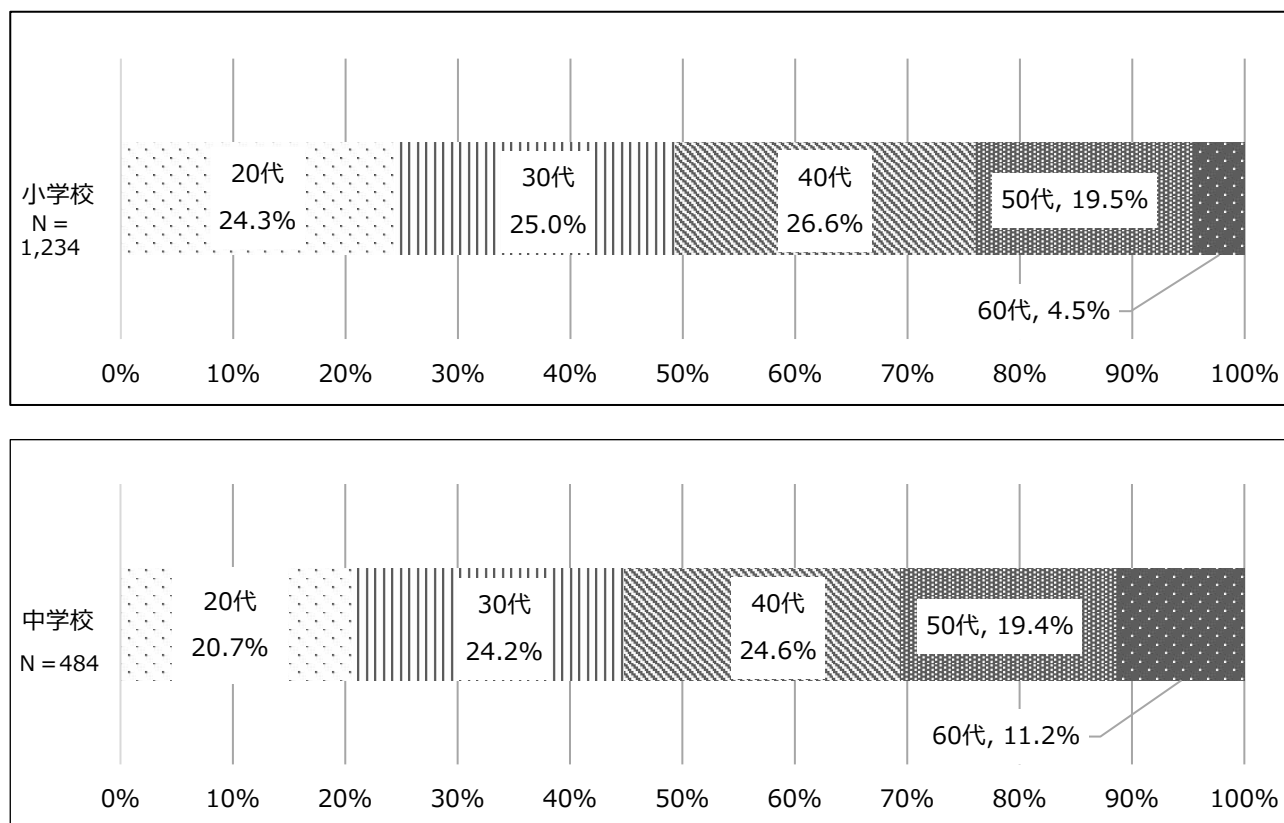
【問1】(単一回答) 所属を教えてください。

図表 5-1-1 回答者の所属

	対象者数	回答数 (回収率)
小学校	1,737	1,234 件 (71.0%)
中学校	829	484 件 (58.4%)

【問1-2】(単一回答) あなたの年齢を教えてください。

図表 5-1-2 回答者の年代

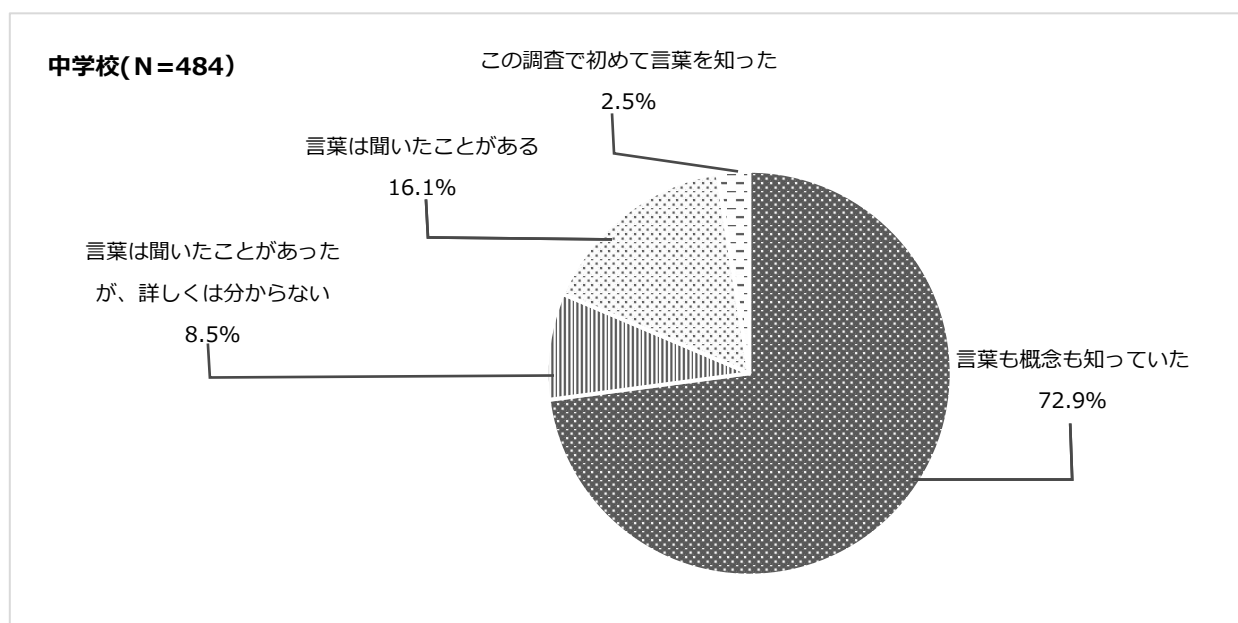
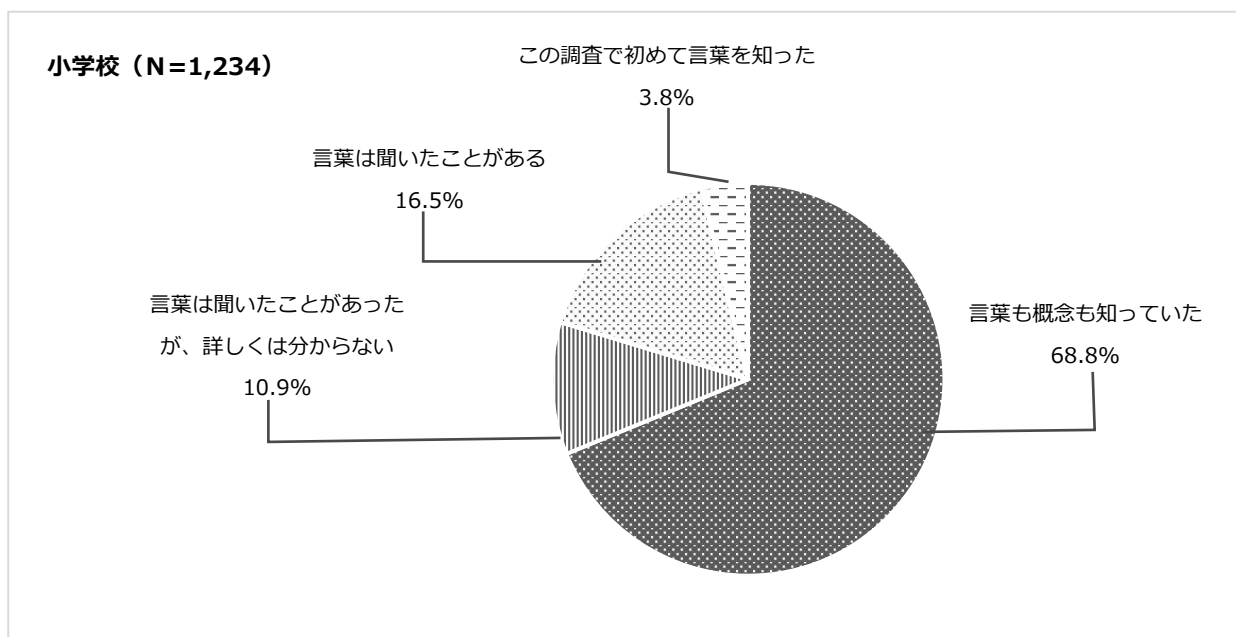


## 5-2 ヤングケアラー概念の認知度

「言葉も概念も知っていた」と回答した教員の割合は小学校、中学校とも7割近くになっている。「言葉は聞いたことがあったが、詳しくは分からない」、「言葉は聞いたことがある」、「この調査で初めて言葉を知った」の合計は約3割あり、今後も周知・啓発を丁寧に行う必要がある（図表5-2）。

【問2】（単一回答）あなたは「ヤングケアラー」という言葉や概念を認識していましたか。

図表 5-2 ヤングケアラー概念の認知度



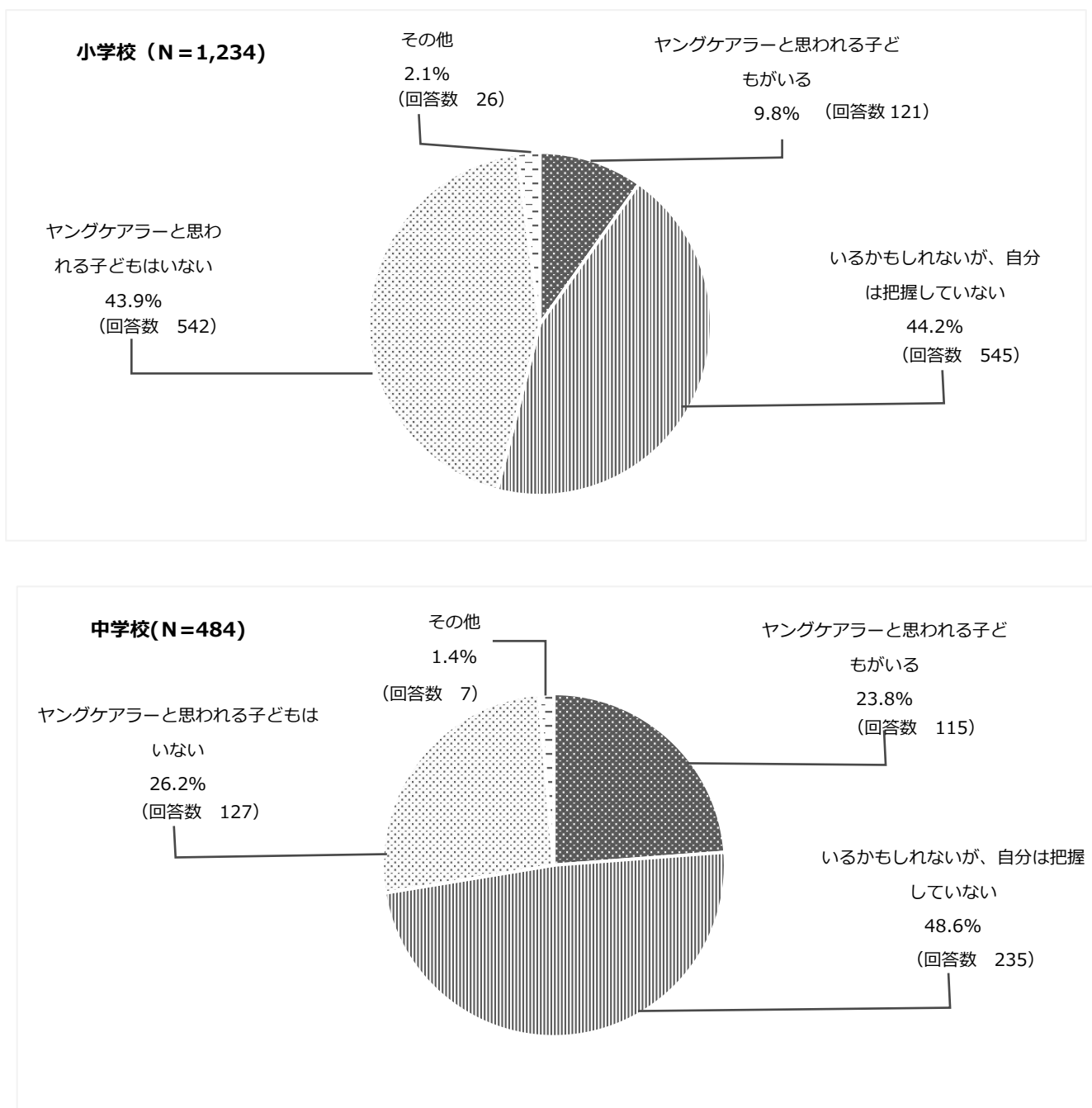
### 5-3 ヤングケアラーの把握

ヤングケアラーの把握については、小学校と中学校の回答で差異があり、「ヤングケアラーと思われる子どもがいる」の回答は小学校では約1割、中学校では2割以上となった（図表5-3）。

教科担任制の中学校では、ヤングケアラーと思われる子ども1人について複数の教員が認知し、回答している影響が考えられる。また、「いるかもしれないが、自分は把握していない」、「いない」と回答した教員が、小学校、中学校ともに多くなっている。

【問3】（単一回答）現在、勤務する学校全体にヤングケアラーと思われる子どもはいますか。

図表 5-3 ヤングケアラーと思われる子どもの存在



## 5-4 教員が把握しているヤングケアラーの状況

ヤングケアラーと思われる子どもに気付いた要因として、「家族の世話をしている旨の発言があった」との回答が、小学校、中学校ともに5割以上と多くなっている。他には「提出物などの遅れ」「遅刻、欠席、早退が多い」などの回答が多い（図表 5-4-1）。

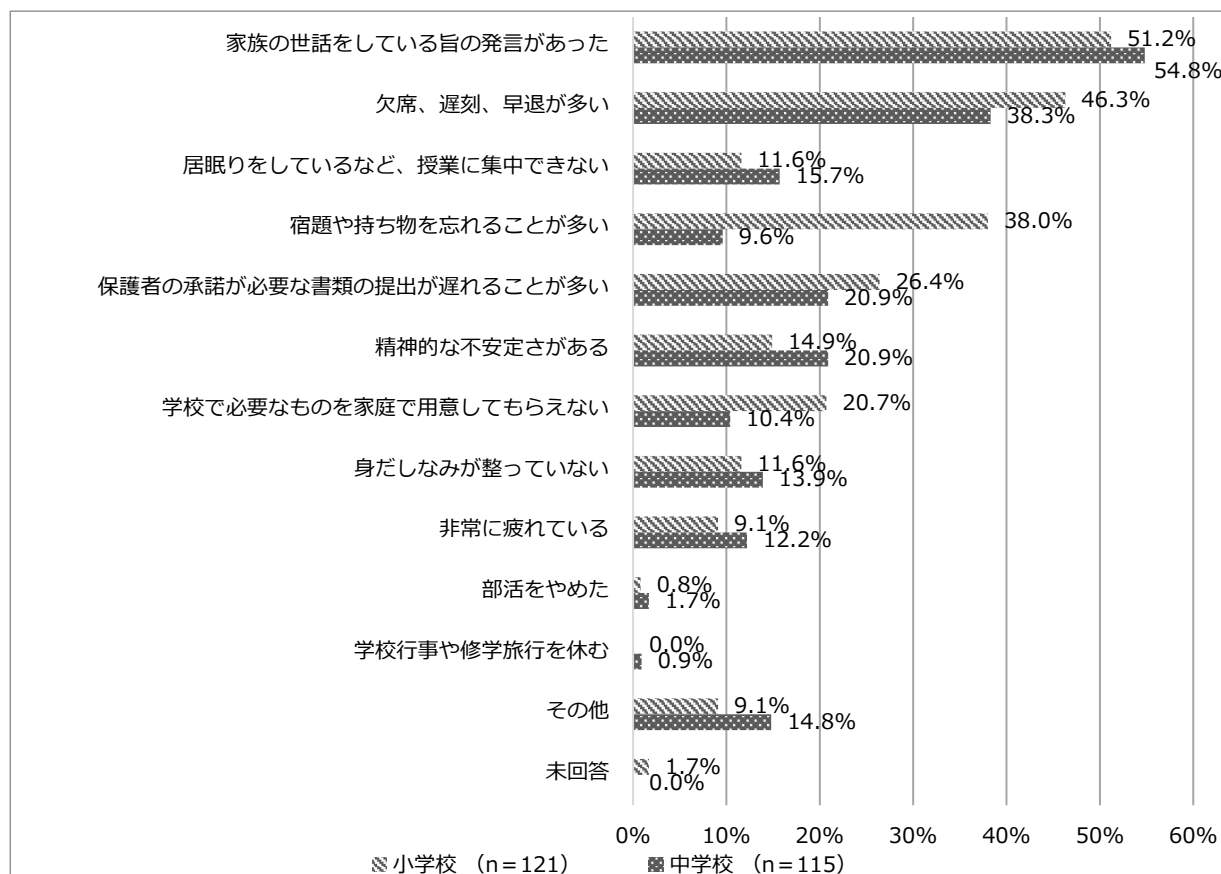
子どもの世話の把握状況については、ヤングケアラーと思われる子どもがいると回答した教員の3割前後（小学校 32.2%、中学校 26.1%）が「把握している」と回答しているほか、発見した複数の子どものうちの一部の子どもについては状況を把握している、といった回答も、小学校で 43.8%、中学校で 59.1%あった（図表 5-4-2）。

把握した世話の内容については、「家事（掃除、食事の支度、洗濯など）」、「幼いきょうだいの世話」、「目が離せない家族の見守り」が多いが、児童・生徒実態調査では確認が難しかった「精神的に不安定な家族の世話」、「依存症の家族の対応」についても小学校、中学校ともに回答があった（図表 5-4-4）。

これらの事例をヤングケアラーからのサインや実態として共有し、発見から支援にどのようにつなげていくかを示していく必要がある。

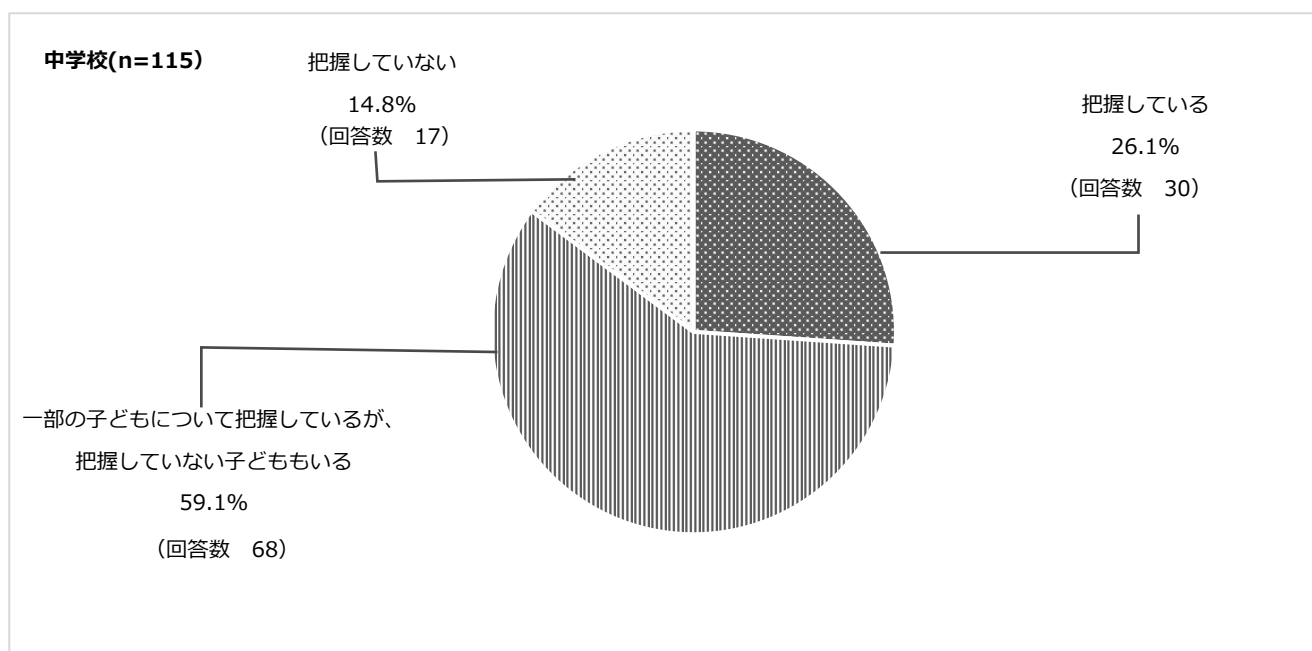
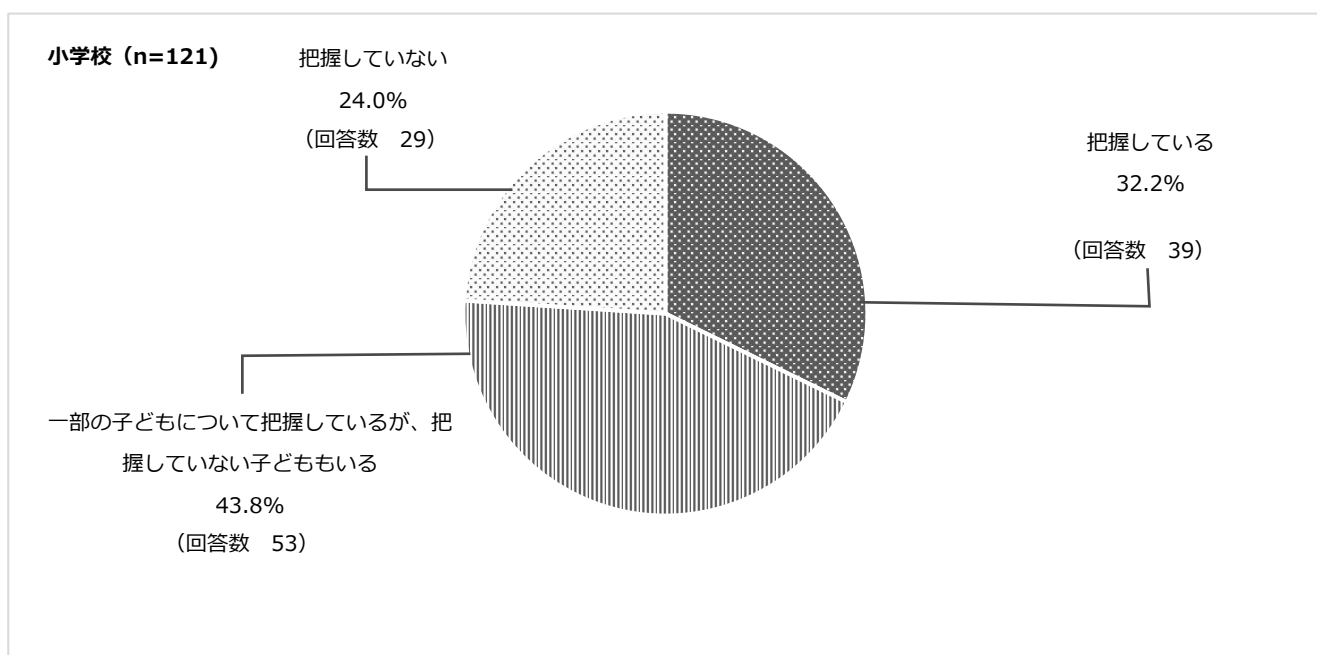
【問 3-2】（複数回答）ヤングケアラーと思われる子どもに気づいたきっかけは何ですか。

図表 5-4-1 ヤングケアラーに気づいたきっかけ



【問 3-3】（単一回答）ヤングケアラーと思われる子どもの家族の世話の状況を把握していますか。

図表 5-4-2 子どもの世話の把握状況

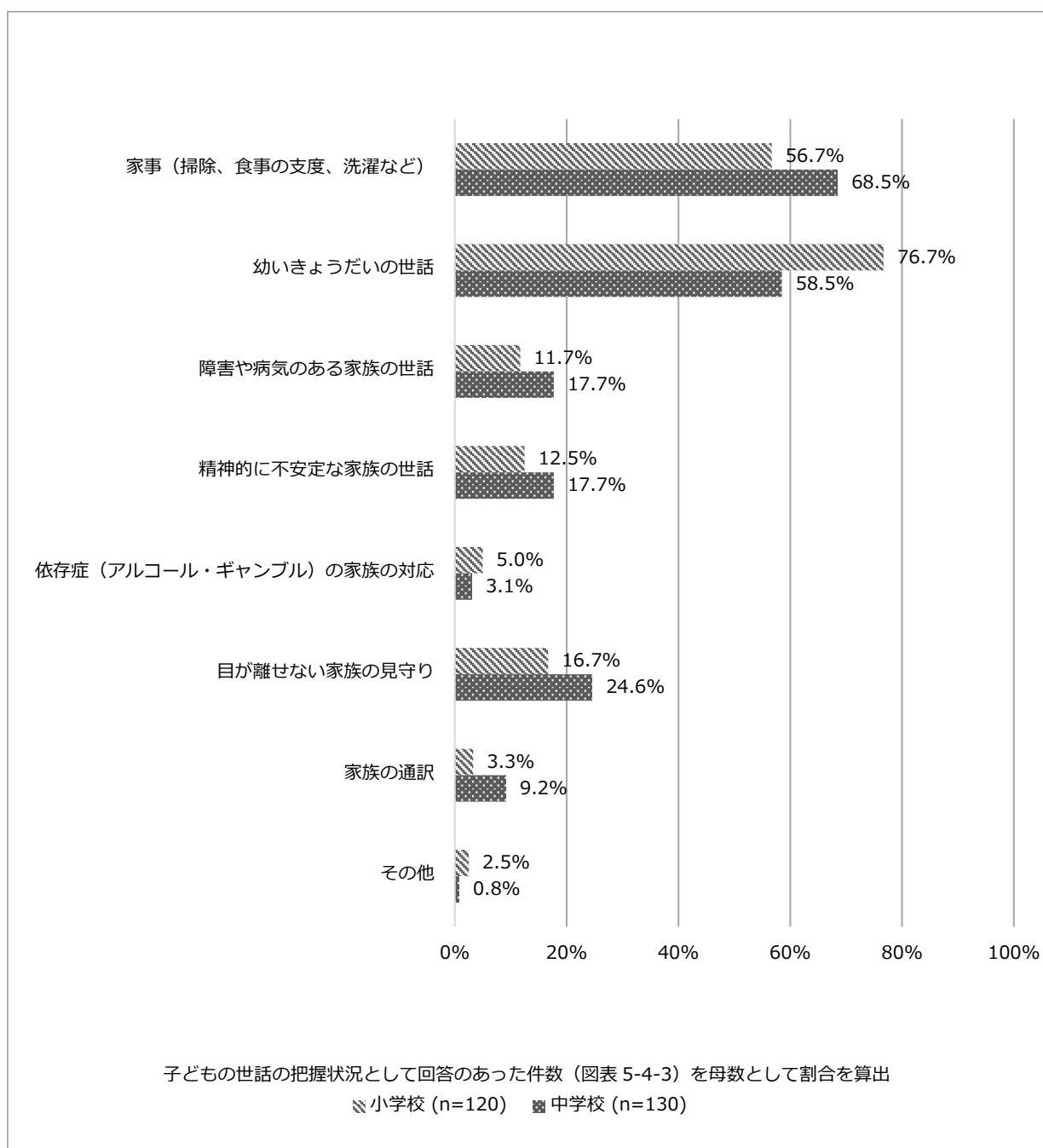


【問 3-3-2】(複数回答) ヤングケアラーと思われる子どもの家族の世話の状況について教えてください。

図表 5-4-3 子どもの世話の把握状況(世話の内容の回答件数)

	小学校 (n=92)	中学校 (n=98)
子どもの世話の状況を把握しているとして、世話の内容の回答があった件数 (1回答者最大3件まで記載)	120	130

図表 5-4-4 教員が把握した世話の内容



## 5-5 学校で行っているヤングケアラーへの支援

「ヤングケアラーがいる」と回答した教員にヤングケアラーへの支援の有無を聞いたところ、小学校で 44.6%、中学校で 34.8%が「支援を行っている」と回答しているほか、発見した複数の子どものうちの一部の子どもについては支援を行っているという回答も小学校で 24.8%、中学校で 30.4%あった。一方で、小学校、中学校で 3 割前後の教員が、「支援を行っていない」と回答している（図表 5-5-1）。

支援の内容として多い回答は、小学校、中学校とも「子どもの話を聞いている」、「学校で情報を共有し、支援に向けて検討している」、「区の支援機関と連携している」であった（図表 5-5-2）。

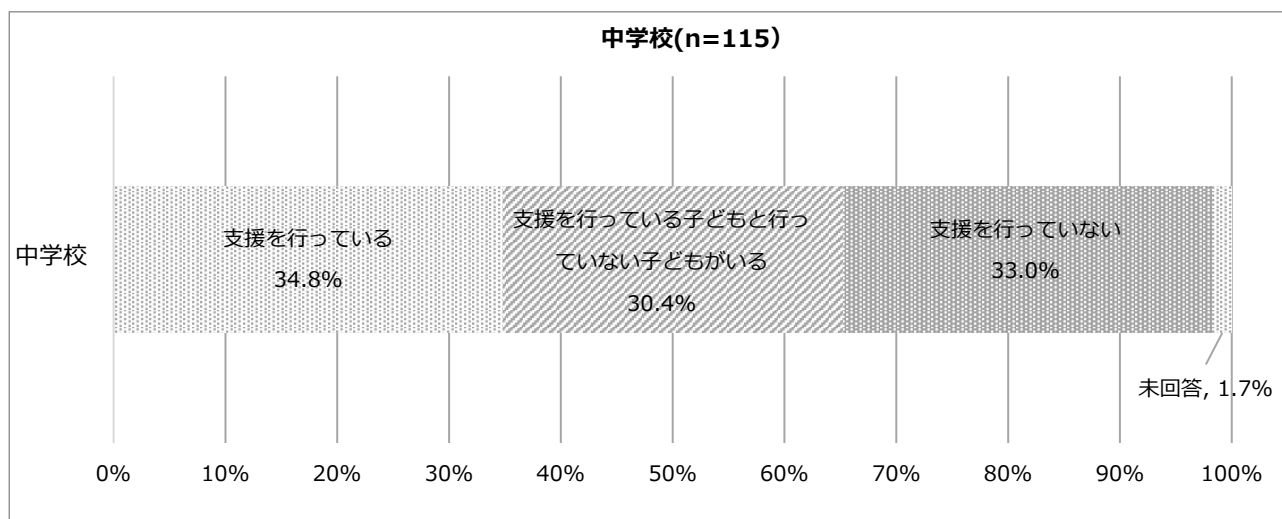
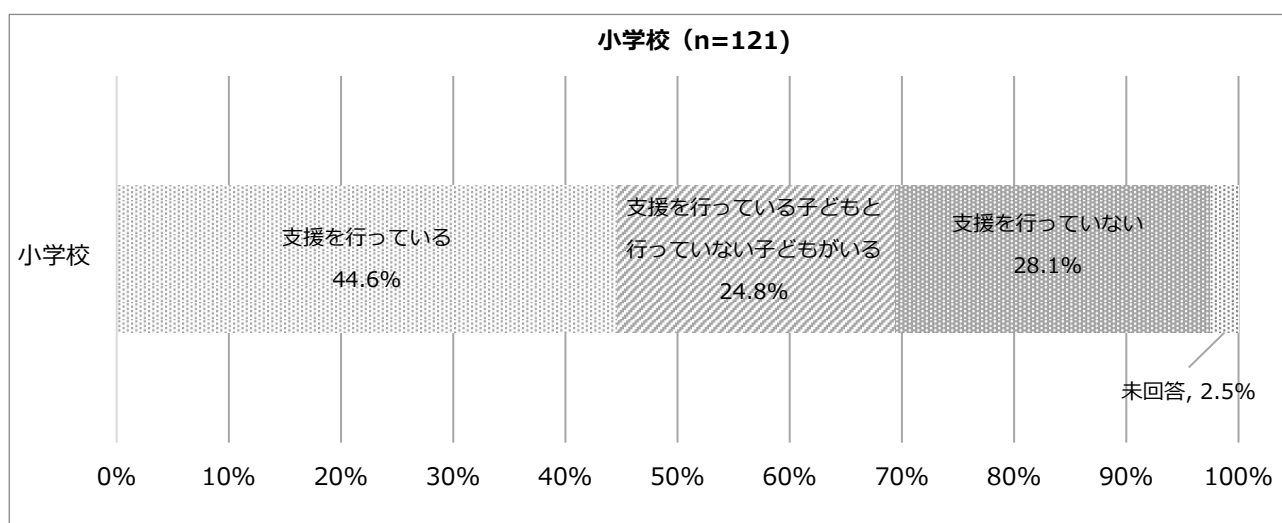
支援を行っていない理由としては「本人や家族に自覚がない」、「家庭のデリケートな問題に学校が関われない」、「支援の方法が分からない」などの回答があり、中学校では「家庭のデリケートな問題に学校が関われない」の回答が特に多くなった。また、「保護者が支援を拒否した」との回答も一部あった。回答からは、学校側から家族の問題にアプローチすることの難しさが読み取れ、ヤングケアラーの存在を認知しても、支援につながらない場合があることがわかる。

「支援の必要な状況ではない」という回答については、児童・生徒実態調査の結果からもわかるように、ヤングケアラーの多くは緊急の支援が必要な状況ではないということと関連があると考えられる。また、「そもそも学校が家庭内の状況に関わるべきではない」という回答が少数あった（図表 5-5-3）。

【問 3-4】（単一回答）問 3 でお答えいただいた子ども（ヤングケアラーと思われる子ども）に、現在、学校として何らかの支援を行っていますか。

図 5-5-1 支援の有無

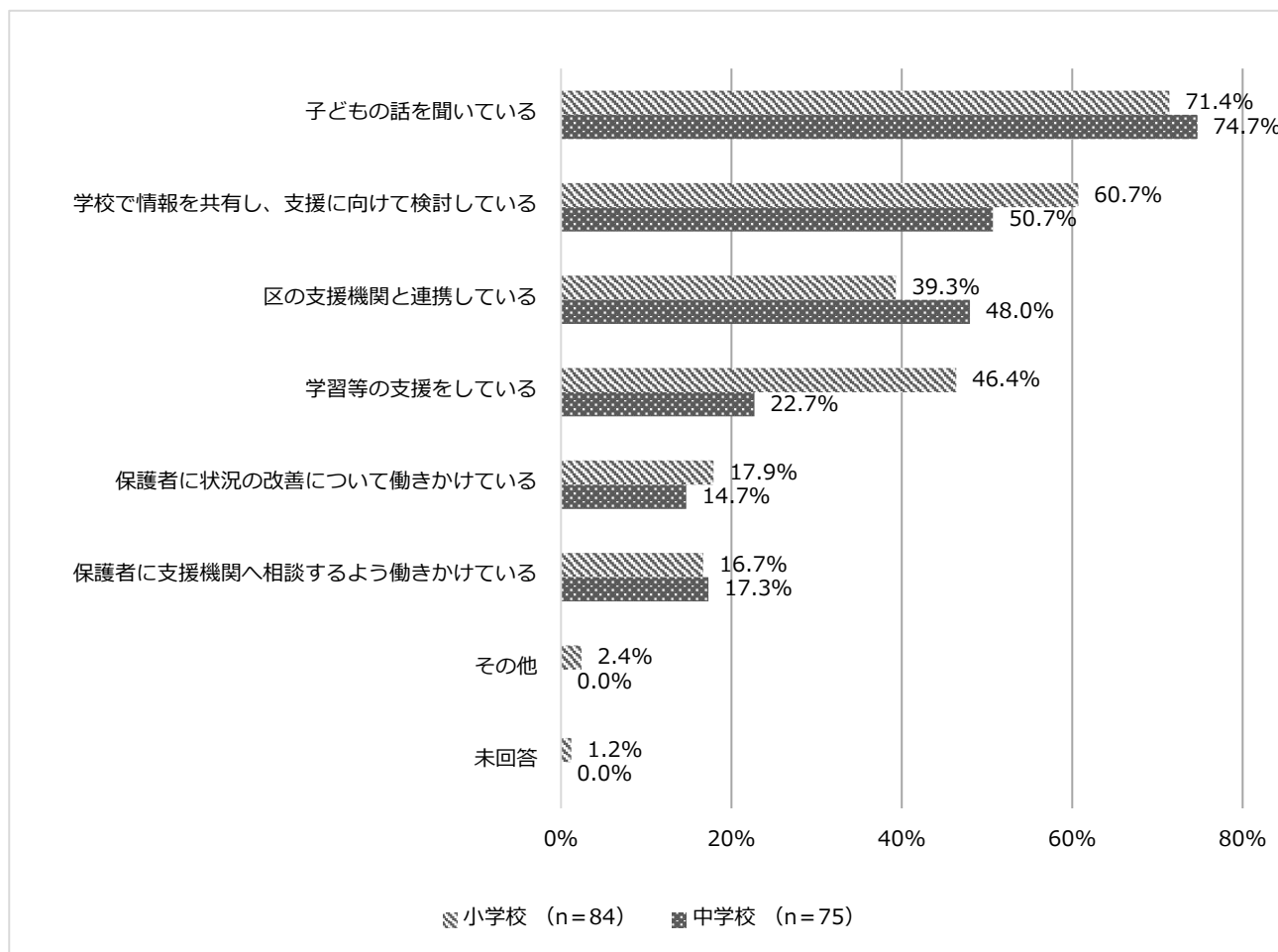
	小学校 (n=121)	中学校 (n=115)
支援を行っている	44.6% (54)	34.8% (40)
一部の子どもに支援を行っているが、支援を行っていない子どももいる	24.8% (30)	30.4% (35)
支援を行っていない	28.1% (34)	33.0% (38)
未回答	2.5% (3)	1.7% (2)





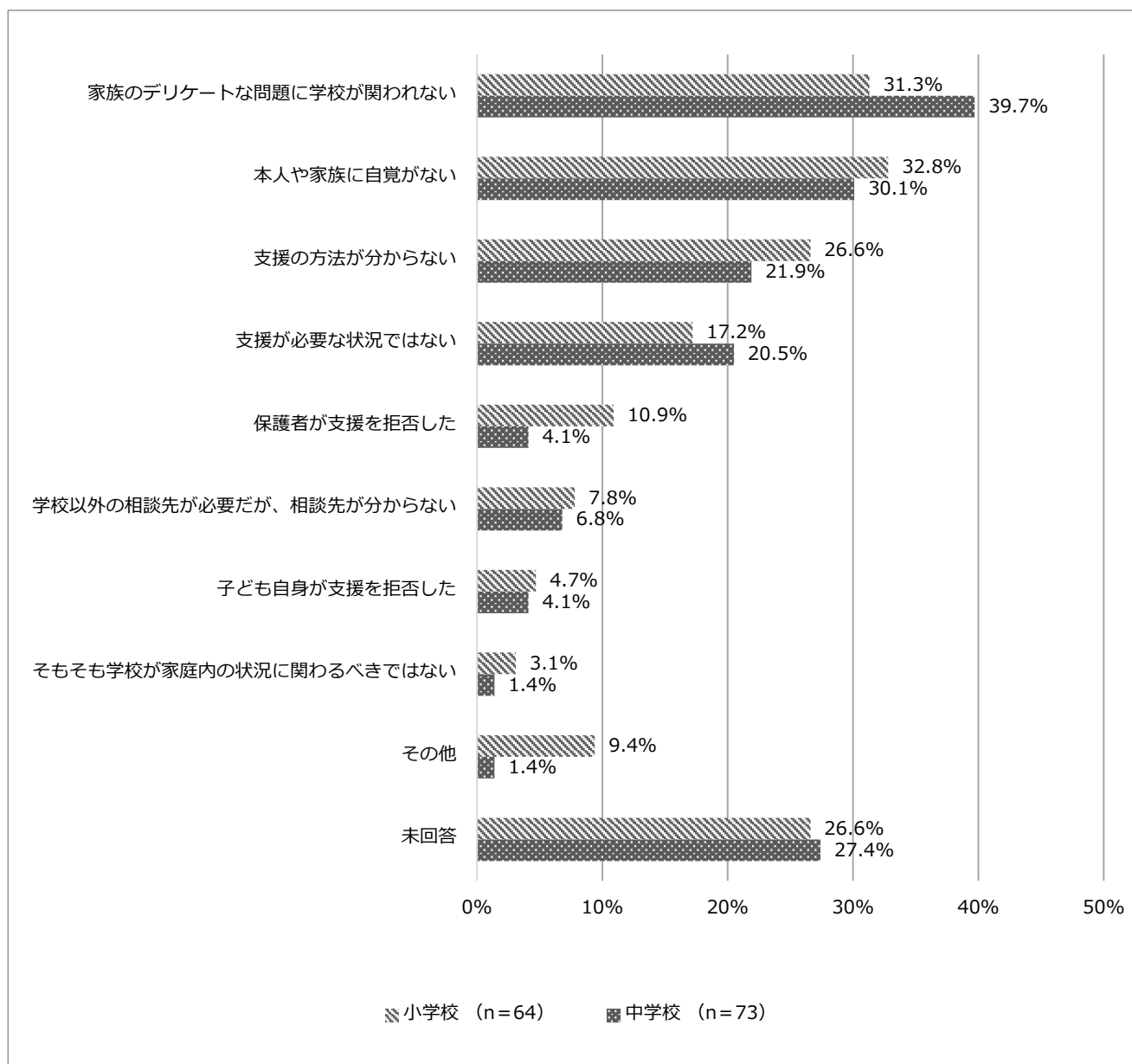
【問 3-4-2】（複数回答）行っている支援の内容を教えてください。

図表 5-5-2 支援の内容



【問 3-4-3】(複数回答) 支援を行っていない理由や要因としてあてはまるものを教えてください。

図表 5-5-3 支援を行っていない理由



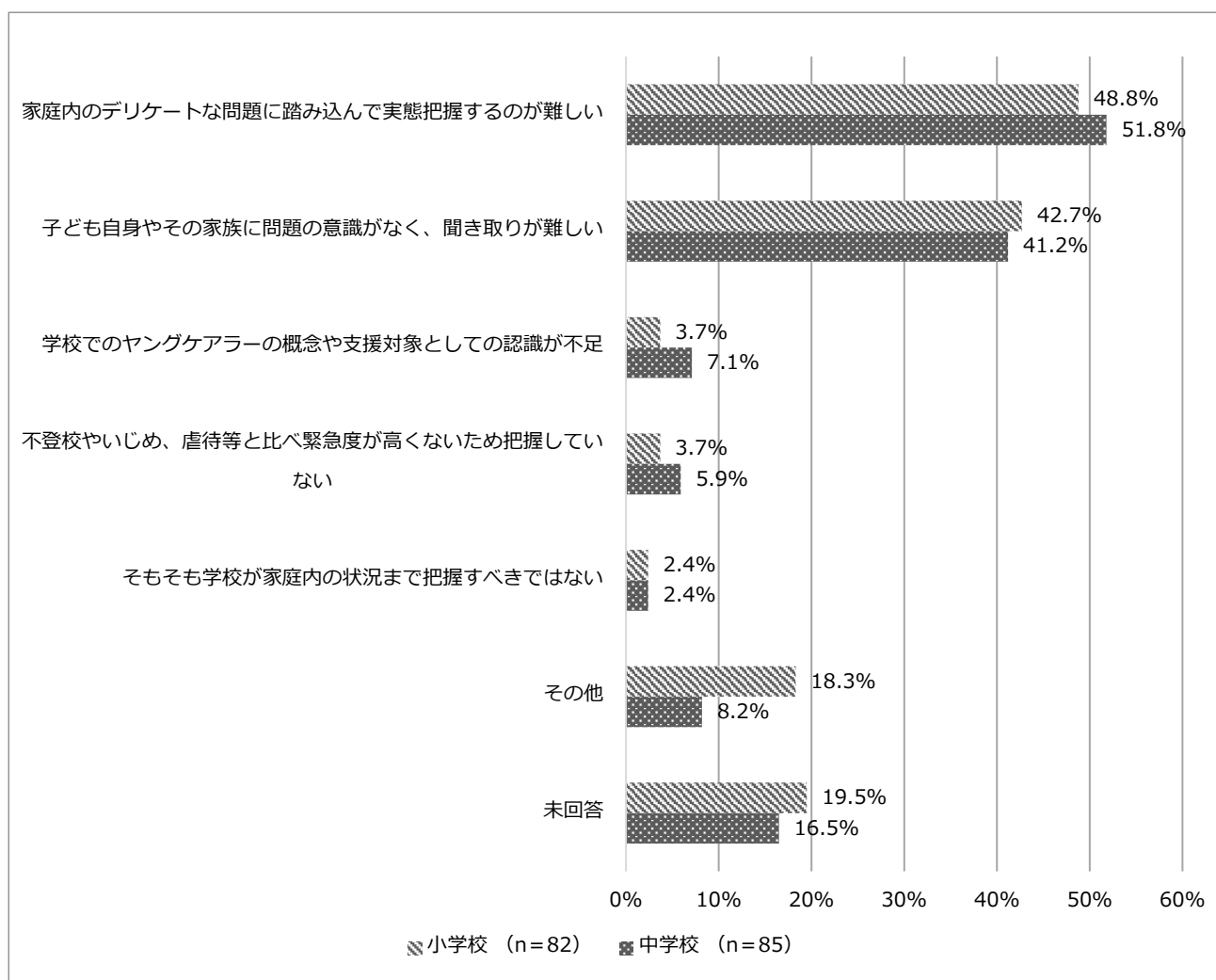
## 5-6 教員がヤングケアラーを把握できない理由

ヤングケアラーと思われる子どもがいると回答した教員のうち、小学校 24.0%、中学校 14.8% が子どもの世話の状況を「把握していない」と回答しており、発見した複数の子どものうちの一部の子どもについては把握しているが、把握していない子どももいる、という回答も小学校で 43.8%、中学校で 59.1%あった（図表 5-4-2）。

把握していない理由について、「家庭内のデリケートな問題に学校が踏み込んで実態把握するのが難しい」、「子どもや家族に問題の意識がなく、聞き取りが難しい」が、小学校、中学校ともに多いことから、支援が必要であるという認識はあっても、実際には踏み込むことが難しいと考えている教員が多いことが分かる（図表 5-6）。

【問 3-3-3】（複数回答） 家族の世話の状況を把握していない理由を教えてください。

図表 5-6 把握できない理由



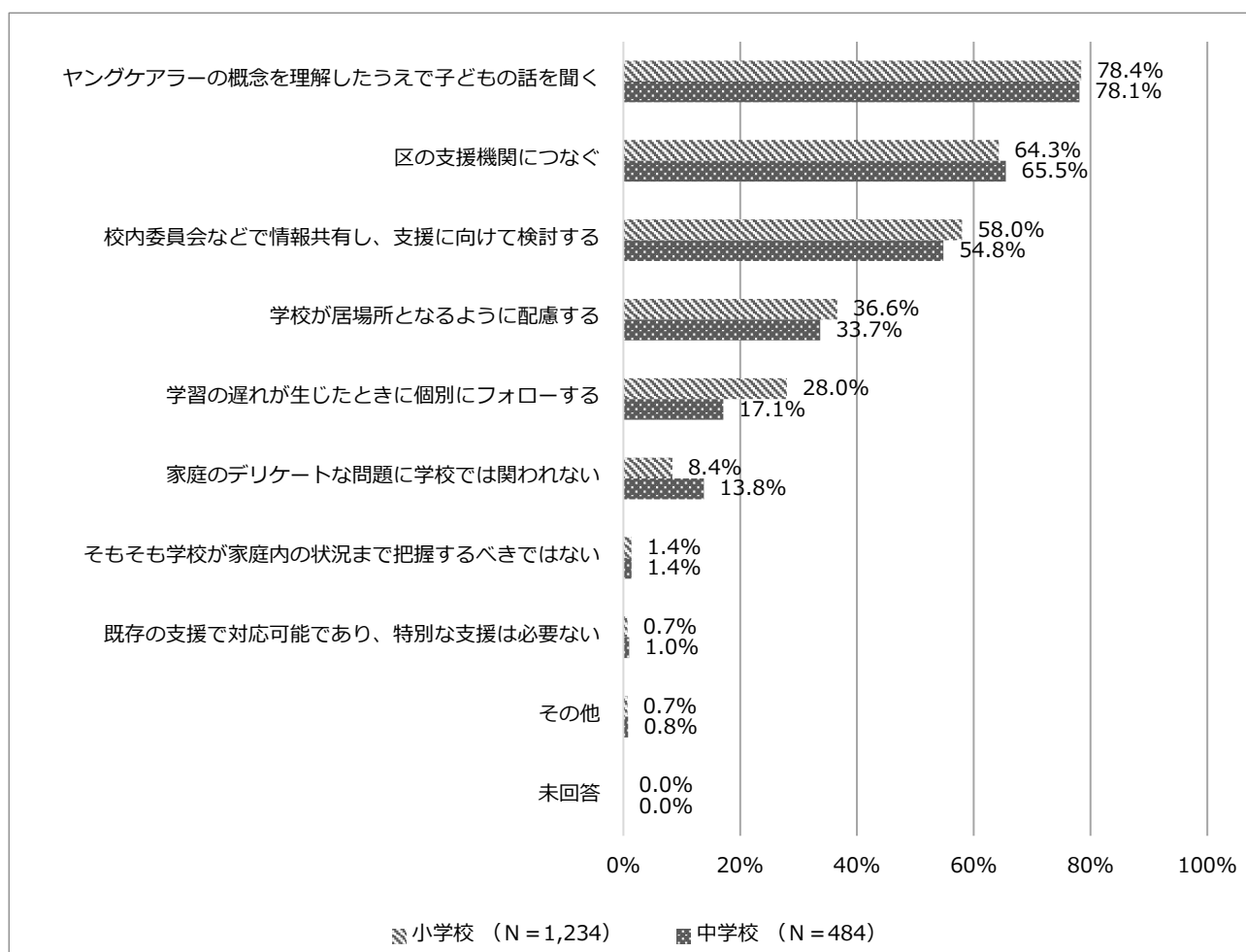
## 5-7 ヤングケアラー支援に対する教員の思い

ヤングケアラーの支援についての設問では「ヤングケアラーの概念を理解したうえで、子どもの話を聞く、声をかける」、「区の支援機関につなぐ」、「校内委員会などで情報共有し、支援に向けて検討する」の回答が多く、校内で組織的に対応しようと心がけていることが分かる（図表 5-7-1）。

校種によって大きく回答に差異はないため、概ね「課題」と感じていることは同じであると考えられる。「本人や家族にヤングケアラーという問題の認識がなく、支援の理解が得られない」という回答や、一部の教員からは「そもそも学校が家庭内の状況までを把握するべきではない」との声もあった（図表 5-7-2）。自由記述では、上記の課題に加え、きめこまやかな対応をすすめるための教員の時間確保の課題や体制づくりに関する記述、家庭の考え方に対する啓発・アプローチが必要だとする記述があった（図表 5-7-3）。

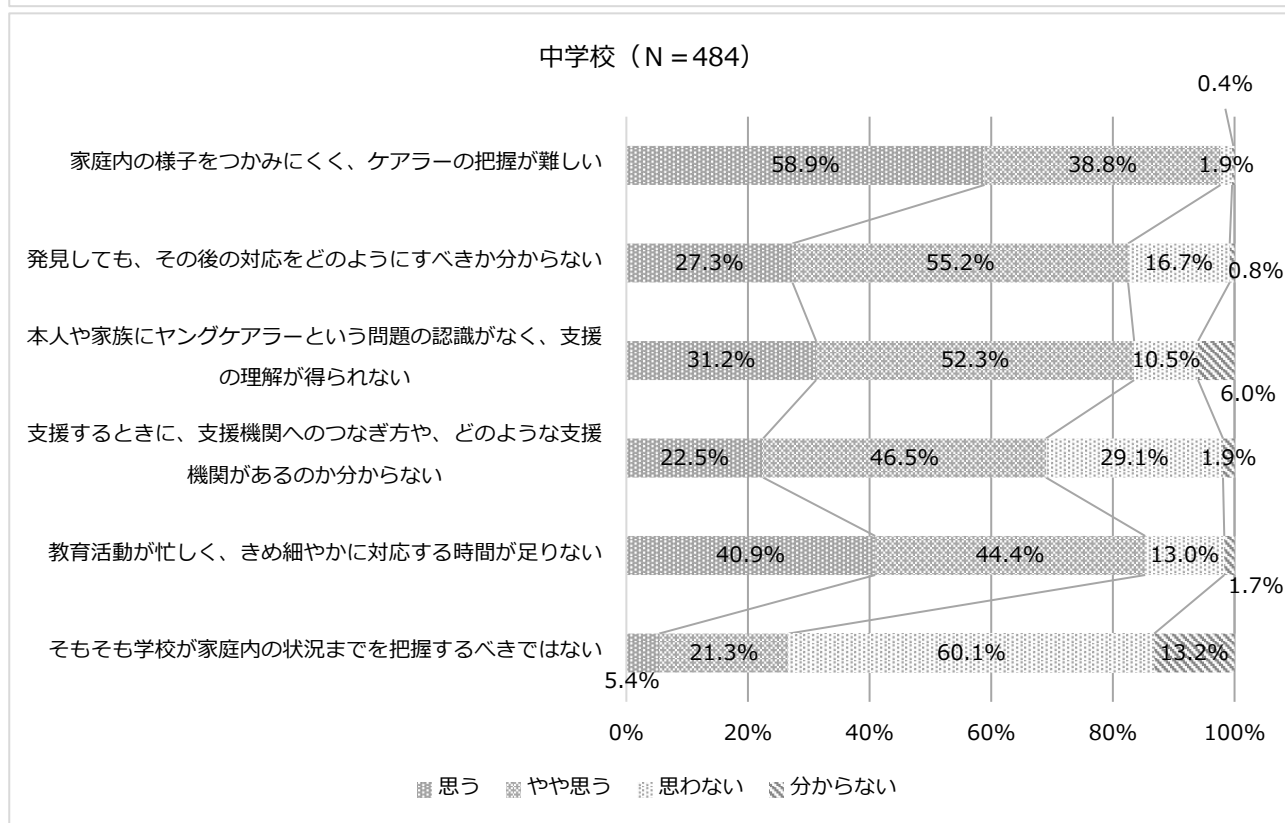
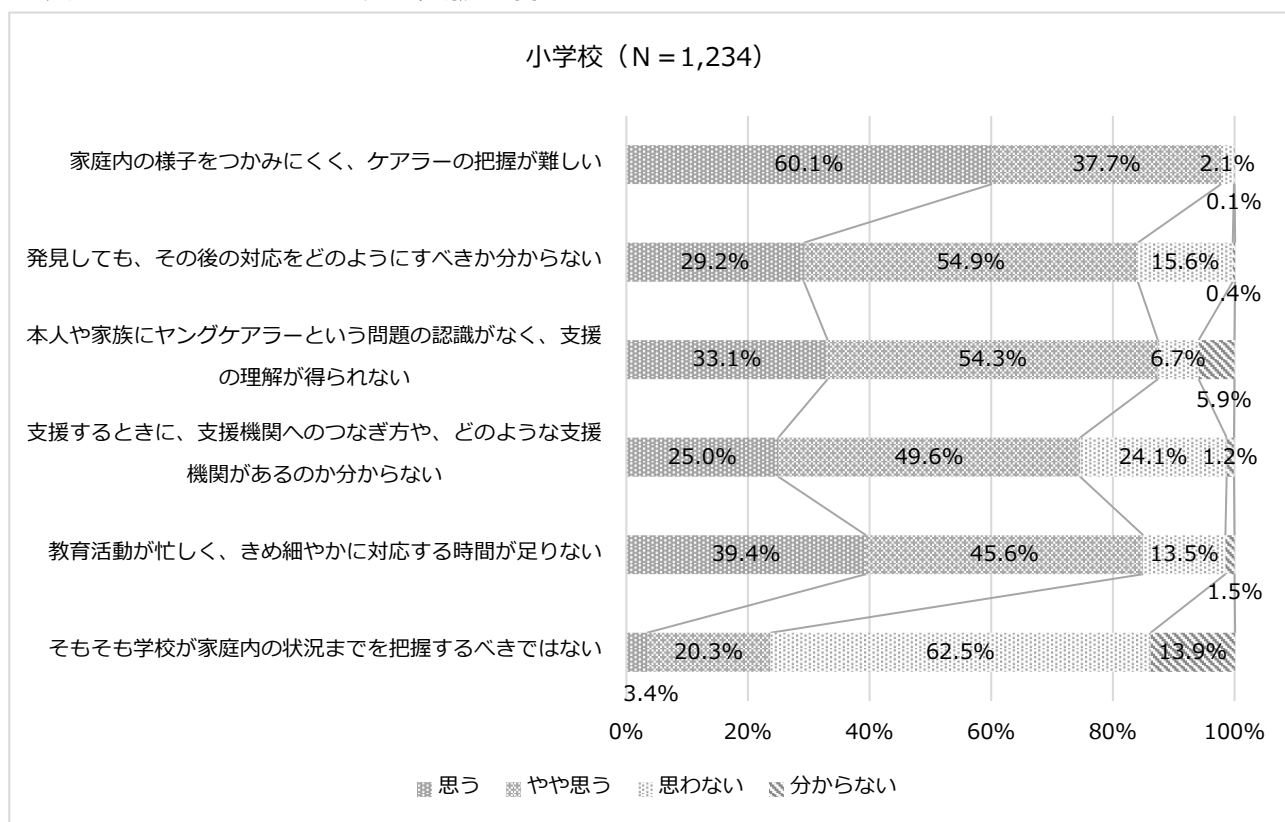
【問 4】（複数回答）ヤングケアラーへの支援について自分の考えに近いものを選択してください（3つ以内）。

図表 5-7-1 ヤングケアラー支援に対する考え



【問5】 ヤングケアラーへの支援を学校で行うにあたり、あなたが課題と思うことを教えてください。（各項目について「思う」「やや思う」「思わない」「わからない」のいずれかを選択答）

図表 5-7-2 ヤングケアラー支援の課題



【問6】（自由記述）ヤングケアラーへの支援について、ご意見があればお聞かせください。

図表 5-7-3 ヤングケアラーの支援に対する意見

	小学校 (N = 1,234)	中学校 (N = 484)
記載	16.0%	20.7%
未記載	84.0%	79.3%

自由記述（代表的なものを抜粋）

発見に関する課題

- ・手伝いなのか、ヤングケアラーなのかの判断が難しいため、線引きができない。
- ・子ども自身が「話したくない」と思ってしまえば、介入できない部分もある。
- ・家のことも自分のこともきちんとできる子どももいるため、問題が顕在化してこないという現状もある。

体制づくりに関する課題

- ・子どもたちが SOS を出しやすい環境を整える必要がある。
- ・校内の支援体制を見直し、支援するための体制づくりが必要である。
- ・支援するにあたり、「フローチャート」があると助かる。
- ・学校と福祉関係の部署との連携が必要である。
- ・支援すべき子どもが見つかったときの、実際の「つなげ方」が分からない。
- ・研修など、学ぶ機会がほしい。
- ・心のケアの充実が必要である。

時間確保の課題

- ・教育活動その他の事務作業、他の子どもの対応もあり、対応する時間が足りない。
- ・勤務時間内に授業があるため、家庭に介入するといったきめ細やかな対応をしようと思うと、勤務時間外の対応になってしまう。

家庭支援に関する課題

- ・家庭そのものの考え方があるため、学校や教師が入り込めない場合がある。
- ・家庭での考え方に対してアプローチしてほしい。
- ・保護者への啓発方法などの工夫が必要だと思う。